研究論文

恵庭型プレイセンターにおける母親の学びと自己評価

大滝　まり子

（2011年1月13日受稿）

抄録：　本研究では、１）恵庭型プレイセンターにおける親の学習　２）参加群と不参加群の自己評価の比較の２点について検討した。

結果は以下のとおりである。（１）参加群の77.8％が、他の親やスタッフから「子どもへの接し方」について学んでいた。また、学習会への出席者は参加群の40％弱で、出席者の多くが「子どものほめ方・叱り方」、「コーチング」などのテーマを有意義だと考えていた。（２）自己評価に関する11項目の質問をして４段階で評価してもらい、「そう思う」と「大体そう思う」を選んだ人の割合で参加群と不参加群の比較をしたところ、参加群は９項目で不参加群より６～16ポイント多かった。特に、「私は家族にとって大切な存在である」は参加群では100％、不参加群では94.4％であった。この結果にはプレイセンターでの活動が影響していると考えられる。これに対して、参加群が不参加群より少なかったのは「私は心身ともに健康だ」と、「私は毎日充実している」の２項目であった。

Ⅰ　研究の目的

恵庭型プレイセンターは、2008年に日本で初めて地方公共団体によって設置されたプレイセンターである。民間の子育て支援においては、親の自主的活動によって運営されるものが増えているが、地方公共団体が子育て支援を行う場合、一般的に親はサービスの受け手としてのみとらえられ[1)]、いわばお膳立てされた場に参加するだけである。これに対してプレイセンターは、保育に親が参加することを求められるうえに、親の学習も基本方針としており、子育て支援としては親に多くを求めすぎるのではないか、子育てに悩んでいる親の助けになるのかという疑問があった。

しかし、昨年度の調査では、「恵庭型プレイセンター」は設置後５か月の時点で、母親たちに受け入れられつつあり[2)、3)]、サービスの受け手にとどまることに満足していない親たちの活動の場として、子育て支援のなかでも重要な位置を占めつつあることが明らかになった。参加群の親の62％が「自分の居場所がある」と感じており、77％が「親子双方が受け入れられている」と感じていたのである。また、子どもが成長した後もプレイセンターにかかわりたいと考える親は54％であった。

それでは母親はプレイセンターでどのようなことを「学習」したのか。20年度の調査時期はプレイセンター発足後間もない時期であったため、「親の学習」への意識的取り組み[4)、5)]はまだそれほど進展していなかったが、プレイセンター参加後の気持ちの変化として、「おおらかな気持ちで子育てをしようと思うようになった」48％、「子育てを楽しめるようになった」44％、「他の子どももみな愛しく可愛く思えるようになった」37％という結果が得られている。これらはプレイセンターで学んだことといってよい。

そこで21年度は、プレイセンターにおける母親の意識的な学習の場である学習会についても調査した。さらに、「完璧な人はいない」という基本理念のもと、母親たちがお互いに「ダメと言わ

北海道文教大学人間科学部こども発達学科

ない」約束のもとに協働をしていることから、母親自身の自己評価にプラスの影響があるのではないかと考え、自己評価について、参加群と不参加群との比較を行った。

Ⅱ　研究方法

（1）質問紙　　調査内容は平成20年度のアンケートを基にして、再構成した[5]。「自己評価」の各項目については、先行研究[7]の「自己評価」を参考にした。

（2）「プレイセンター参加群」の特徴を明らかにするため、「参加群」と同年齢の子どもを持つプレイセンターに参加していない保護者を「不参加群」として、両群を比較した。

質問紙の配布と回収には、恵庭市子ども家庭課の全面的な協力を得て、次のように実施した。

参加群：2009年12月末にプレイセンター登録家族に１月通信を郵送する際に質問紙を同封し、回収はプレイセンターに参加する際に持参して、回収箱に自由に入れてもらった。

不参加群：フッ素塗布事業と検診の日程に合わせて質問紙を配布した。会場での記入は難しいと判断し、保健課が発送する問診票に同封して郵送し、回収は健診当日とした。

回収率：参加群27.9％（配布193、回収54）、
　　不参加群85.6％（配布250、回収164）。

なお21年度の報告書[6]では、プレイセンターに参加していない対照群を一般群と表記しているが、20年度と比較しやすいように、本論文では不参加群という呼称を継承した。

Ⅲ　結果と考察

(1) 両群のプロフィール

①親の年齢　　参加群・不参加群ともに30代が約７割で最多であるが、参加群は40代が不参加群より約10ポイント多く13.0％。不参加群は10代と20代の合計が26.2％で、参加群の20.4％を約６ポイント上回っていた。このように、参加群の年代がやや上であることは、20年度と同様である。

②現在の仕事　　参加群・不参加群ともに「専業主婦で無職」の割合が最多であった。この点は20年度と同じであるが、21年度、参加群は88.9％、不参加群は76.5％でその差が拡大した。また、「フルタイム・常勤」は参加群1.9％（１人）、不参加群は13.6％（22人）であった。プレイセンターでは「親の協働」や「親の学習」が基本方針となっているため、参加群は不参加群よりも、このような活動形態を受け入れやすい条件を持っている人が多いと考えられる。

③１家族当たりの子ども数と子どもの年齢　　１家族当たりの子ども数は、参加群1.61人・不参加群1.59人で、僅差である。参加群では２歳と３歳の合計が52.9％、不参加群では０歳と１歳の合計が53.3％であった。また、小学生以上の子どもは、20年度は参加群17.2％、不参加群8.2％であったが、21年度は参加群10.4％、不参加群8.4％と差が小さくなった。

(2) 親の学習（参加群）

プレイセンターの基本方針のうち、「親の学習」は学習会への参加だけでなく、日々の保育時に見たり聞いたり、話し合ったりして自然に学ぶことも含まれる。特にお茶の時間にはさまざまな会話が繰り広げられている。プレイセンターでは「お互いにダメと言わない」というルールがあるため、指導されたり注意されたりして学ぶのではなく、自分で気づくことがそのまま学びになっていると考えてよい。ここで挙げた「学んだこと」は、こうした自然な学びを含んでいる。

① 他の親やスタッフ（市職員）から　学んだこと（複数回答可）

育児について疑問や不安のある親は、スタッフである市職員（保育職）や他の親に相談して個々の問題を解決することもあるが、意見を押しつけられることはなく、自分で気づくことが尊重されている。ここでは、自然な学びか学習会においての学びかは区別していないが、回答からは親が

持っていた疑問や不安が推測できる。たとえば「いろいろな育て方があり、他の人と違っていてもいい」ということを学んだ親が50％もいることは、自分の育児がこれでよいのかという不安があったことの表れであろう。

表１　プレイセンターで他の親やスタッフから学んだこと（複数回答）、（　）は回答者数 54 に対する割合

学んだこと	人数（％）
子どもへの接し方（叱り方、遊び方など）	42（77.8）
親同士が共に成長し、学び楽しむ姿	33（61.1）
子どもの立場になって考えること	30（55.6）
いろいろな育て方があり、育て方は他の人と違っていてもいい	27（50.0）
特にない	1　（1.9）
その他	3　（5.6）
回答総数	136
回答者数	54（100）

②学習会における学び

恵庭型プレイセンターでは、月曜日と木曜日に活動するグループと火曜日と金曜日に活動する２グループがあり、普段は独立して活動している。各グループは原則的に水曜日を交代で学習会の日としている。「学習会」は堅苦しい感じがするので「学びあい」と称しているグループもあるが、今回はグループによる違いは調査していない。

a.学習会への出席状況

表２　学習会への出席頻度

出席頻度	人数（％）
ほぼ毎回出席	13（24.1）
月に１度くらい出席	8（14.8）
最近は出席していない	18（33.3）
出席したことはない	14（25.9）
不明	1　（1.9）
回答者数	54　（100）

学習会への参加は、「毎回」と「月１回程度」を合わせて38.9％で、一度も参加したことのない人が25.9％である（表２）。出席が少ない原因の一つとして、参加群の約９割が、学習会があることを知らずに入ってきているということが挙げられる。

次に、「最近は学習会に出席していない」人と「出席したことがない」人に、出席しない理由を質問した（表３）。複数回答をした人もいるが、68％が「時間の都合がつかない」を選択した。月木、火金のどちらのグループも、保育日と異なる水曜日に学習会を設定しているため、そのためだけにもう一日外出することは難しいのだと思われる。

表３　学習会に出席しない理由　　ｎ =31

出席しない理由	人数（％）
時間の都合がつかない	22（68.9）
堅苦しそう	3　（9.4）
学習の必要を感じない	1　（3.1）
テーマに魅力がない	0　（0.0）
その他 子どもが離れない　（4 人） 緊張する（2 人） 曜日が不都合など（5 人）	11（34.4）
回答総数	37
回答者数	31　（100）

b.学習会で学んだこと

学習会では、出席者の近況報告に続き、ニュージーランドのプレイセンターの翻訳テキストを用いて子どもの遊びやプレイセンターについて学ぶ。その際、お互いが感想や意見を述べ合うので、話題が自然に広がっていく。また、講師を招いて新たな学習をすることもある。

表４　学習会で有意義だったテーマ・内容（３つ以内、自由記述）

有意義だったテーマ・内容	人数
子どものほめ方・叱り方	7
自己紹介を含めたフリートーク	6
コーチング	5
子どもの遊び	4
ストレスについて（リフレッシュ法など）	3
プレイセンターについて（運営について）	2
絵本について	2
子どものけんかへの対応	2
子どもの病気やけが	2
その他	6
回答総数	39

学習会のテーマは、当然子育てに関することが中心である。表中の「コーチング」も中身は子育て法である。「ストレスについて」も子育て中のストレスの解消策に関連している。これらのテーマの中でも特に関心が高いのは「子どものほめ方・叱り方」であった。

c.今後の学習会への期待

上記bと同様、今後取り上げてほしいテーマでも、「ほめ方・叱り方」など子育てに関する内容が大半であったが、「プレイセンターの協働や学習」に関することに関心が高いことに注目したい。今後は、子育て法だけでなくプレイセンターの在り方、活動の方針などにもっと時間を割くことも必要だと思われる。一方、「美容」については、プレイセンターとして取り組むべき学習内容とは異なる。プレイセンターの役割に沿った「学習」に絞るべきであろう。

表５　今後希望する学習会のテーマ・内容（３つ以内、自由記述）

希望するテーマ・内容	人数
プレイセンターの協働や学習について	5
ほめ方・叱り方	3
子どもの成長過程について	3
食育	2
母親の気分転換法	2
社会性や言葉の育て方	2
その他（美容・救命講習・癇癪への対応など）	8
回答総数	25

d.学習会についての意見（自由記述）

調査は選択式を基本としたため、選択肢以外の意見を知るために、学習会について自由記述を求めた。回答数は15件にとどまったが、学習会の開き方を改善しながら、今後も継続したいという意向がくみ取れる。

以上の結果から、学習会への出席者は過半数に達しない状態だが、出席者は学習会を大切な学びの場としてとらえていることがわかった。また、

表６　学習会についての意見（自由記述）

学習会についての意見	人数
実施方法の改善	9
・曜日の変更	(4)
・テキストを配布し、学習会の内容を全員に知らせる	(1)
・学習会の名称は堅苦しいが内容が楽しいので、名称を変える	(1)
・子どもについて学ぶ時間を中心にする	(1)
・新年度からはプレイセンターの共通理解のため初めは全員の出席を義務づける	(1)
・託児ボランティアを募る	(1)
期待・感想	5
・役立つ知識やスキルが得られる	
・楽しい、ほっとする　など	
回答総数	14

出席しない理由（表３）では、学習会に明確に関心がないと思われる人は37名中１人（「学習の必要を感じない」）だけであった。

「堅苦しそう」という回答には、「学習会」という呼称の影響があるのではないか（表６）。テーマはあっても、それについての自由な話し合いだということが、浸透していないようである。

(3) 親の自己観・自己評価（両群）

自己評価に関する11項目[7]について、プレイセンター参加群と不参加群との比較をした（表７）。プレイセンターではお互いの生き方や意見を尊重し合いながら協働や学習を進めている。これに関して、プレイセンターではスタッフも母親もお互いに愛称で呼びあい、○○ちゃんのお母さんとか、おばさんという呼び方はしないという約束がある。母親は１個人として扱われるのである[8]。そのため参加群は、不参加群よりも自分の良さを素直に認め、自己評価が高くなるのではないかと予想した。

調査では、項目ごとに「そう思う」、「だいたいそう思う」、「あまりそう思わない」、「全然そう思わない」の４段階で自己評価してもらったが、表７には「そう思う」と「だいたいそう思う」だけをまとめた人数と割合を載せた。参加群と不参加群の人数に大きな差があったうえ、不参加群に欠損値が多かったため、単純集計による比較である。

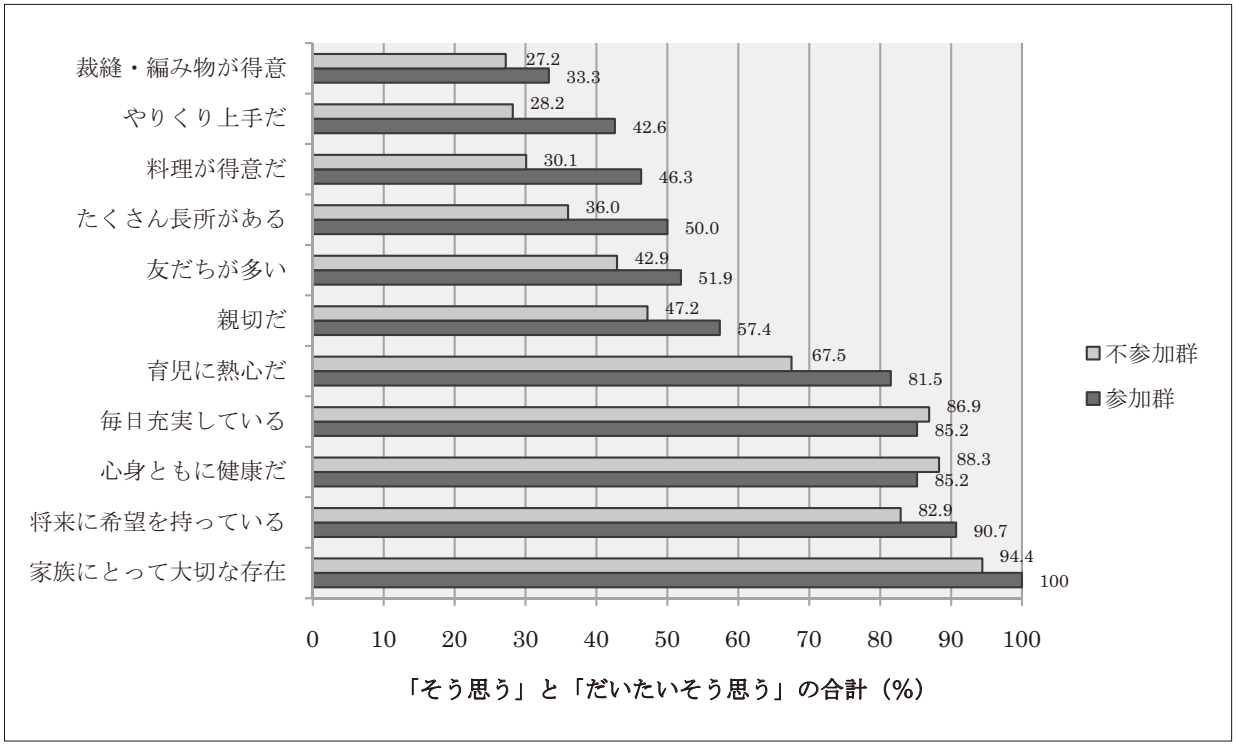

図１　母親の自己評価　「私は」に続く 11 項目について、「そう思う」と「だいたいそう思う」の合計
参加群：ｎ＝54 、不参加群:③ｎ＝162、⑧･⑨ｎ＝161、⑩ｎ＝160、⑪ｎ＝158、その他はｎ＝163。

日本人は自分を低く評価する傾向があるためか、「・・・が得意（上手)」には50％を超えた項目はないが、それでも参加群が不参加群より６～16ポイントも高いことは注目に値する。

次に、「私はたくさん長所がある」、「私は友だちが多い」･「私は親切だ」は参加群が、不参加群を９～14ポイント上回っていた。お互いを認め合い、協働を進めるプレイセンターの活動がこれらの自己評価に影響しているのではないか。この点については、「積極的で自信のある親が活動の場を求めてプレイセンターに参加しているから」という可能性もあるが、「私は心身ともに健康だ」と「私は毎日充実している」が小差とはいえ不参加群より低いことを考えると、必ずしも親の資質には還元できないであろう。ただしこの2項目は両群ともに85％以上で、差は３ポイント以内と小さかった。「私は育児に熱心だ」は参加群が81.5％で、不参加群より14ポイント多かった。

注目したいのは、「私は家族にとって大切な存在だ」で、これは参加群が100％であった。ただし内１名は「だいたいそう思う」と「あまりそう思わない」を両方選択していて迷いが見られたが、ここでは肯定的意見の方に含めている。この項目については、不参加群も94.4％と高い数値を示しているため、母親の大多数が家族の中で誇りを持って生きていることが分かる。とくにプレイセンターは「親子が共に育ちあう場」として活動しているため、この項目の100％または100％に近い数字はプレイセンターとして大きな意味を持っているといえよう。

以上のように、自己評価は全体的に見て、参加群が不参加群より高かった。

今後はプレイセンターへの参加状況と活動の満足度、および自己評価との関連についても調査し、参加型の子育て支援が母親にどのような影響を与えるかをさらに詳細に検討したい。

付記　本研究は、平成21年度の内閣府・地方の元気再生事業に採用された、恵庭市の「恵庭型プレイセンター社会実験プロジェクト」の委託研究

費を受けて実施した研究(主任研究員大滝まり子)のデータの一部を再分析したものである。

文献

1) 前原　寛、子育て支援の危機—外注化の波を防げるか—　、131-146、東京、創成社、2008
2) 大滝まり子、参加者及び不参加者のアンケート調査「恵庭型プレイセンター社会実験プロジェクト」共同研究報告書、2-60、2010
3) 大滝まり子、恵庭型プレイセンターにおける母親の参加意識、北海道文教大学研究紀要第34巻、9-15, 2009
4) 日本プレイセンター協会、プレイセンターへようこそ、4-7、東京、日本プレイセンター協会、2001
5) Gwen Somerset, How Playcentre Works,21-23, New Zealand, Wyatt & Wilson Print, 1990
6) 深谷昌志、育児不安の国際比較、93-94、東京、学文社、2008
7) 大滝まり子、第1章　恵庭型プレイセンター参加者の意識調査、「恵庭型プレイセンター社会実験プロジェクト共同研究報告書vol.2」, 3-58、2011
8) 柏女霊峰、新時代の保育サービス、66-69、東京、フレーベル館、2000

The Learning and Self-Esteem of Mothers at “the Eniwa-Type Playcentre”

OHTAKI Mariko

Abstract: The purpose of this paper is to consider the following two: (1) What a group of participants in the Eniwa-type playcentre (hereinafter, PC) learned through the playcentre activities, and (2) the self-concept of the PC as compared with a non-participants group (NP).

The following results were obtained: (1) 77.8% of PC said they learned about child-rearing from other participants or playcentre staff members. 40% of PC attended the study sessions provided by the playcentre, and many of them said those sessions where they learned such topics as "how to praise and scold their children" and "coaching techniques in child rearing" were useful. (2) In nine out of the eleven items concerning self-esteem, PC was six to sixteen points higher in the percentage of the number of the affirmative responses to the items than NP. The biggest differences between the two groups were found in their responses to “I am important for my family." 100% of PC and 94.4% of NP choose "yes" or "nearly yes." These differences are attributable to having or not having participated in the activities at the playcentre. The other noteworthy differences in self-esteem between the two groups were found in two other items: "I am in good health both physically and mentally." and "I have spent every day feeling full." The percentage of the affirmative responses to these two was a little lower in PC than in NP.